

ぐらいだす」「それが この家主さんは、ものが宜う判つて居て、借家人から敷金を取るのは、可哀想なと言ふので、敷金はなしや」「へエー、敷金なしとは、私々貧乏人に取つては、結構な事で、それで家賃は、どの位いで……」「家賃は一月が十八圓や」「エツ十八圓…… アノ十八圓、敷のいらぬは結構やが、家賃の十八圓は、此の家に少し高いやうに思ひますが」「いや チョツト聞くと高いやうやが、それを、じいと聞くと、十八圓が安いのや」「へエー どう言ふ譯で安いのでやす」「サア、となりの家へ這入たら、一ヶ月十八圓を、家主へ持つて行くと思ふから高いが、毎月家主から、十八圓と言ふのを、お前さんところへ呉れるのや」「へエー……モウ一遍聞きますが、なんだすか一ヶ月住んで、家主から十八圓、私の方へ呉れますか」「そうだす」「それは、ぼろい話しやが、何で空いてますね……」「それが、ア、やつて空いて居るは、アノ家へ人が住みませんが、一ヶ月はおろか十日と云ひたいが、三日とつゞきまへん」「へエー するとあの家に、何ぞ仔細がおますか」「そりやおますとも、能う考へてみなはれや、この辛い時節に、無償やない、十八圓と言ふ金を呉れるには、仔細がおます」「イヤ そりや御もつとも、その譯は、どう言ふ仔細でおます」「さうやな……マアあなたが、お聞きになるのやよつて、お話しいたしますが、マアおかけやす、實はなア、あの家は、日のうちは何の事もないが、日が暮れますと……ナア」「へエ……」「あの裏に塀がおます」「へい」「其の塀の向ふに又塀がおます」「へい」「ツマリ塀が二ツある」「へい へい」「何を言ふてなはるの

や、其の塀の向ふが、ツクネン寺と言ふ、お寺の墓原や、それが、宵のうちは何事もないが、夜が更けてくる、かれこれ十二時すぎ、一時もまわり、もう二時にも、ならうとすると、世間は、森とする、屋の棟三寸さがるか、水の流れも、暫しは寝居ると言ふ、時分になるとナア」「へエー」「遠寺の鐘が陰に籠つて、ポオンと鳴ると」「へエー モシわて恐わがりだツぜ、モツト派手に言ふとくなはれ」「すると、あの家が、どことはなしに、メキ／＼メキと鳴り出すので」「ナルほど」「すると、椽側をば、濡草鞋をはいて歩くやうに、ジタ／＼ジタと音がするとナア」「へエエ モシ チョツトおいゑへあげてもらいます」「暫らくすると、椽側の障子をば、誰が明けるとなしに、スースーとスウと明くと、あなたが寝て居る、むねの處を、グウと押へるので、苦るしいので、目を明くと、色蒼ざめた、髪を、おどろに亂して、血みどろになつた女が、あなたの顔を、恨めしそうに眺めて、ガラ／＼と笑ふ……」「ウワツツ」「オイ／＼、モシあなた、オイコレ、途方もない怖がりやなあ、あわて、かどの手洗鉢を、ひつくり返して走つて行た」「源さん」「ヤア喜いやんか、まあ這入り」「御めん、併し、俺、いま聞いて居たんやが、何かへ、となりの空家から、あんなものが出るのかへ」「お前、あの話しを聞いてたのか」「そうや」「そんなら言ふが、心配しいな、何んにも出エへんのや」「フーン 何にも出エへんのに、なんであんな事を、言ふたのや」「出やへんけども、あの男に出るといふのは、それには譯がある」「どう言ふ譯や」「其れは、此の長屋は五軒あるのに、だいたい